日本語史　　清川

＜1　時代区分　＞

0.	古代	B.C. 13000 ～ A.D. 600	縄文・弥生・古墳時代
1.	上代	600 ～ 784	飛鳥・奈良時代　約 200 年間
2.	中古	784 ～ 1184	平安・院政時代　約 400 年間
3.	中世	1184 ～ 1603	鎌倉・室町時代　約 400 年間
4.	近世	1603 ～ 1867	江戸時代　約 300 年間
5.	近代	1868 ～ 1945	明治・大正・昭和前半時代　約 80 年間
6.	現代	1946 ～	昭和後半・平成・令和時代　約 75 年間

加藤 彰彦，佐治 圭三，森田 良行 編『日本語概説』おうふう，1989 年

次のような区分もあり

上代　　奈良時代以前

中古　　平安時代

中世前期　院政　鎌倉時代

中世後期　室町時代

近世　　江戸時代

現代　　明治以降

＜２　音韻史＞

０）先史　古代

２９７年の「魏志倭人伝（ぎしわじんでん）」に倭国（わこく）という名前が登場している

倭国で話されていた言葉が倭語であった記録が存在するので
３世紀まで日本語史を遡ることが可能

・子音＋母音の開音節
・母音融合で８母音
・母音の連続を嫌う
・単子音
・ハ行音は両唇破裂音パ
・ラ行音、濁音が語頭にたたない

１）上代　（飛鳥時代の始まり５９４年から）
テキスト「概説日本語学改訂版」P.46～

・８母音（上代特殊仮名遣い）
ieo に甲類と乙類がある
・上代特殊仮名遣い
「古事記」「日本書紀」「万葉集」などに用いられた万葉仮名に
用いられた仮名遣い
昭和初期に、橋本進吉が発見
・母音連続を嫌う

・母音調和（有坂秀世（ありさかひでよ）　池上禎造）

・ハ行音は両唇破擦音ファ
・語頭にラ行音や濁音（dzg など）はこない

２）中古　テキスト「概説日本語学改訂版」P.47～

・漢字漢文の影響で母音が減少
　上代特殊仮名遣いが消滅
・ア行とヤ行のエ段が統合して je
・ア行の「い、え」とワ行の「い、え」が混乱
・ア行の「お」とワ行の「を」は混同
・音便４種
　　イ音便
　　ウ音便
　　促音便
　　撥音便
・拗音の発生
・連声（れんじょう）
・語頭に濁音がくる
・ハ行転呼音

３）中世　テキスト「概説日本語学改訂版」P.48～

・母音融合で、ア列イ列ウ列エ列オ列の長音が発生
　オ列の長音は開音合音の区別あり　au→ 開音 oo　　eu →合音 oo
・四つ仮名は前半区別があり、後半乱れる
　　Gi（ぢ）/ ji（じ）　　dzu zzu（づ）/ zu（ず）
・連濁　複合語の後項の語頭清音が濁音になる
・音便一般化
・拗音の直音化　kwi→ki kwe→ke　kwo→ko
・ハ行音はファ、ハ共に用いられ、ｐ音は別の音として認識される。

４）近世　テキスト「概説日本語学改訂版」P.49～

・エ列長音　おもしろい→おもしれえ　たいがい→てえげえ
・ハ行音がｈ音に
・オ列長音の開合の区別がなくなる
・合拗音の直音化　クヮ→カ　グヮ→ガ
・促音化　言ふて→言って　取り付いて→とっついて
・撥音化　あるめえ→あんめえ　引き抜いて→ひんぬいて
・ヒ　シの混同　朝日新聞

５～６）近現代

・東京語が共通語として普及
・関西方言、東京方言のアクセントの違い
・外来語が増加して、ディ　ファ　などが増える
・母音の無声化（開音節が守られなくなってきている）
　無声子音に挟まれたイとウ　→　きしゃ　くち
　無声子音に続く語末文末のイとウ　→　です　ます
・アクセントの平板化　ファイル　サポーター
・ガ行鼻濁音の衰退

＜３　文字史＞　テキスト「概説日本語学改訂版」P.73～

０）先史　古代

・神代文字（じんだいもじ）は存在せず
漢字伝来以前に古代日本で使用されていたという文字

・５世紀埼玉県稲荷山古墳から発見された鉄剣（金錯銘鉄剣　きんさくめいてっけん）の１１０文字
左は、ワカタケル大王（おおきみ）
雄略天皇を表すと思われる
・熊本県江田舟山古墳から
出土した太刀の６０文字
万葉仮名で地名、人名が
書かれている
右からも同じ文字があり。
・漢字の伝来は遅くとも４世紀頃まで
朝鮮半島を経由して伝来
漢字は、仮名成立以後は「真仮名」
「男手」と呼ばれる

１～２）上代～中古

・「古事記」（７１２）「風土記」（７１３）「日本書紀」（７２０）
「万葉集」（７５９以降）漢字で書かれた書物
漢文と万葉仮名のミックス
・万葉仮名
日本語の音節を表すために用いた中国の漢字１２００字ほど
・平仮名の成立
万葉仮名⇒草仮名⇒平仮名

・訓読法　訓点

・片仮名の成立

平安初期に成立。

３）中世

・抄物書き（しょうもつがき）

僧侶が仏典の講義を筆記する際に、漢字の字画を省略して書いた

・宛字が盛んに使われた

流石（さすが）

明治以降は外来語の当て字が多くなる　珈琲

・ローマ字

・定家仮名遣い

藤原定家「下官集」１２１０年頃

僧侶行阿「仮名文字遣い」１３６０年頃

４）近世

・契沖仮名遣い

僧侶契沖が「和字正濫鈔（わじしょうらんしょう）」（１６９５）で発表。

・契沖仮名遣いへの反論

橘成員（たちばななりかず）「倭字古今通例全書」において契沖を批判

５～６）近現代

・歴史的仮名遣い

１８７０年頃成立

・現代かなづかい　１９４６年

・現代仮名遣い　１９８６年

・標準語の成立（岡倉由三郎のスタンダードランゲージの訳語）

＜４　文法史＞

１）上代

・動詞は８種類　四段　ラ変　ナ変　下二段　上一段　上二段
　　カ変　サ変

・形容詞は２種　ク活用　シク活用

・尊敬動詞（給フ　）　謙譲動詞（申す　マウス）

・受け身助動詞ユ　ラユ

・ク語法

２）中古

・動詞は９種　下一段「蹴る」

・形容詞の已然形ケレ　シケレが発達

・形容動詞　ナリ活用　タリ活用

・係り結びの法則
　「ぞ」「なむ」「や」「か」の係助詞が来たら文末が連体形
　「こそ」が来たら已然形になる

・尊敬助動詞　ル　ラル　ス　サス

・和化した漢語用語が生じた

３）中世

・動詞は５種に統合される　ナ変　ラ変は４段に　上二段と下二段は
　一段に

・係り結び乱れる

・形容詞ク活用シク活用の区別なくなる

・形容動詞ナリ活用の連体形は「～ナ」になる→現代語と同じ

・敬語動詞は、動詞にアル　ナルをつける

・助動詞「です」

・謙譲語「マイラス」から「マイス」や「マラスル」が生まれて、
　丁寧語として使われるようになる。後に現代語の「ます」になる

・方言　武士言葉　女房詞　ポルトガル語　南蛮語など、多種な単語

４）近世

・動詞は５種　４段活用は５段活用に　二段活用は一段活用に
　已然形は仮定形に

・形容詞　形容動詞は現在とほぼ同じ

・助動詞の変化は大きい
　打ち消し「ない」推量「らしい」希望「ほしい」比況「ごとく」
　「ような」

・武家社会の影響で尊敬謙譲表現の発達が著しい

・接頭辞「お」が形容詞などにつく　おはよう　お静かに

・遊里語　シャンス　サシャンス　→　ンス　シャンス　となる

・丁寧語「ゴザイリマス」「ゴザンス」

５－６）近現代

・動詞５種　活用形は現代のように

・丁寧語「ます」に統一

・５段動詞の可能動詞が生まれる

・英語からの翻訳調の影響
　彼　彼女　～しつつある　～であるところの
　無生物主語の受け身が誕生する

・カタカナ言葉

・新助詞

・新助動詞

・可能形ら抜き言葉

・使役形さ付き言葉

・可能形れ足す言葉